私たちの選択で蘇る、生き物賑わう田んぼ

田んぼに水が入るとカエルの大合唱が始まります。水路にはメダカやドジョウが泳ぎ、梅雨入り前にはホタルも飛び交い始めます。多様な生きものたちを狙って鳥もやってきます。田んぼは、稲を育てる農地ですが多くの生き物の住処にもなっています。同じ食料を生産するコムギ畑やトウモロコシ畑にはこれほど多くの生きものはいません。その理由は、田んぼは、自然湿地に住む生きものたちが移り住んだ代替湿地としての役割を持つためです。

しかし、水路をコンクリート製にし、農薬や化学肥料を使う農業の近代化に伴い、メダカやタガメや大型のゲンゴロウ類等の水田生物は次々と数を減らしていきました。水田や水路を餌場にしていたトキやコウノトリはついに絶滅し、一度は日本の空から消えました。

そして今、再び生き物賑わう田んぼが少しずつ増えています。

減農薬などにより水田生物を守りながら稲を育てる生物多様性米の取り組みです。わたしも京都府京丹後市で、絶滅危惧種のゲンゴロウ類を保全する米作りに学生や農家の方々と取り組んでいます。

わたしたちは食べることを通じて田んぼとつながっています。毎日食べるお米を生物多様性米にすることで、生き物豊かな田んぼが広がります。

日々の消費とは、生き物賑わう懐かしい未来を作る投票行動なのかも知れません。

龍谷大学 政策学部
環境サイエンスコース
里山学研究センター
谷垣岳人

▲大学生が田んぼの生きものを調査

▶身近な自然である田んぼは、子どもたちの生きものとのふれあい場所でもあった

▶多様な生きものが暮らす田んぼ